

## 心房細動へのジゴキシンで死亡率上昇

心房細動患者において、心拍数のコントロールにジゴキシンは広く使われているが、ランダム化試験のデータは少ない。そこで本研究では、ジゴキシン使用と有害転帰との関連について後ろ向き分析を実施し検討した。

心房細動患者の脳卒中および血栓塞栓症の予防について、リバーロキサバンとビタミンK拮抗薬を比較検討した多施設共同ランダム化試験である **ROCKET AF** 試験の被験者のデータを用いた。被験者は45カ国で登録され、心房細動歴およびそのリスク因子に相当する中等度～重度の脳卒中リスクを有していた。なお、心不全の有無は問わなかった。試験開始時および試験期間中のジゴキシンの使用状況で患者を層別化し、ジゴキシンと全死亡、血管系による死亡、突然死との関連を統計学的に分析した。ランダム化を受けた14,171例のうち、試験開始時にジゴキシンを使用していたのは5,239例（37%）であった。分析の結果、ジゴキシンの使用は女性のほうが多く（42% 対 38%）、心不全（73% 対 56%）、糖尿病（43% 対 38%）、持続性心房細動（88% 対 77%）の既往が多い傾向がみられた（それぞれ比較の  $p < 0.0001$ ）。補正後、ジゴキシンと全死亡率の増加（ハザード比：1.17）、血管系による死亡率の増加（同：1.19）、突然死の増加（同：1.36）が認められた。

したがって、心房細動患者へのジゴキシン治療は、全死亡、血管系による死亡、および突然死の有意な増大と関連することが示された。この関連は、他の予後因子とは独立しており、残余交絡の影響も考えられるが、ジゴキシンの影響である可能性が示唆された。今後、心不全がある、なしの心房細動患者でジゴキシン治療のランダム化試験を実施する必要がある。

出典：Lancet. Published online Mar 5, 2015; pii: S0140-6736(14)61836-5